資料３

中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告書 概要版（案）

本報告にあたって

1　はじめに

（1）東日本大震災の特徴

・巨大地震がもたらした想定を超えた被害
・日常を取り戻そうとする人々の歩み
・仙台市における被害と周辺市町村との関わり

（2）東日本大震災の経験を伝えることの困難さと重要性

・世代を超えて記憶や経験を伝え活かすことの困難さと重要性
・東日本大震災の幅広い実相をとらえることの困難さと重要性

2　本拠点のあり方

（1）本市震災復興メモリアル事業における位置付け

仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書（平成26年12月）において、東日本大震災の記憶と経験を継承するためには拠点が必要であり、「仙台市では中心部と沿岸部でそれぞれの場所の特性を生かしながら事業を展開することが有効である」と提言

（2）本拠点の基本的な理念ー“災害とともに生きる文化の創造”

重要性を増す“未来につなぐ視点”
（進む記憶の風化）

“災害を乗り越える術”の変化
（災害の多様化、社会状況の変化）

“東日本大震災”の記憶を
世代を超えて想起可能なものとして伝える

＋

東日本大震災の経験や教訓から
“人間社会のあり方”を視野に持続可能な未来の社会を考える

・市民協働のまちとしての“市民力”
・被災各地とつながる“拠点性”
・集積する知的・経済的資源　　を活かす

時代や地域にふさわしい形で
“災害を乗り越える知恵や技術”を創造

仙台の災害文化を創造し、継承

先駆的な都市モデルを形成し、世界的に貢献

3　本拠点における取組み

（1）地域や主体ごとに異なる経験の蓄積・発信・共有

（2）世代を超えた記憶継承の機会づくり

（3）新たな知恵の創造と社会への実装

（4）広域的にひろがる被災地へのゲートウェイ

4　本拠点の取組みを展開するための仕組みー“記憶と継承と創造の樹”

大地にしっかりと「根」を張り、人々をあたたかく包み込むように「枝」を広げ、年輪を重ねて「幹」を太くし、成長し続ける「樹」のように、記憶の拠り所として想像と創造を喚起する仕組み

（1）災害の記憶を保ち、想像や創造の土台となる“記憶の根”

（具体案：災害の経験を蓄積するアーカイブ機能）

（2）東日本大震災の記憶を日常につなぎ表し続ける“継承の幹”

（具体案：東日本大震災の記憶を日常の中で呼びかける機能／人や時代に応じて視点や構成を変えながら災害経験を表現する展示機能）

（3）災害を乗り越える知恵の創造を喚起する“創造の枝”

（具体案：さまざまな立場、専門や関心をもつ人が、アーカイブを活用しながら交流することで気づきが生まれ、対話・議論することでアイデアを創造し発信できる空間／多様な人に開かれた広場機能）

5　本拠点の取組主体

・専門性を持つ人材を中心に、災害とともに生きる文化の創造に向けて、取組みに専念できる組織的な体制
・世代間のシームレスな連携と継承がなされる柔軟で持続可能な組織体制
・すでに活動している他の施設や組織などと連携・協力しながら、市民をはじめとする幅広い人に取組みの裾野を広げる

6　立地の基本的要件

① 都市のアイデンティティを象徴的に示す場所
② 多くの人が行き交い、交流できる場所
③ 他地域とのつながりを作れる場所

7　今後の検討における留意事項

① 取組みや仕組みの詳細についての検討
② 他施設との具体的な機能分担や連携
③ 事業を担う主体のあり方
④ 本拠点の形態や規模に関する詳細
⑤ 本報告の趣旨を実現するための効果的な手法等